

ともに 共生社会へ

to mo ni

耕作放棄地でソーラーシェア

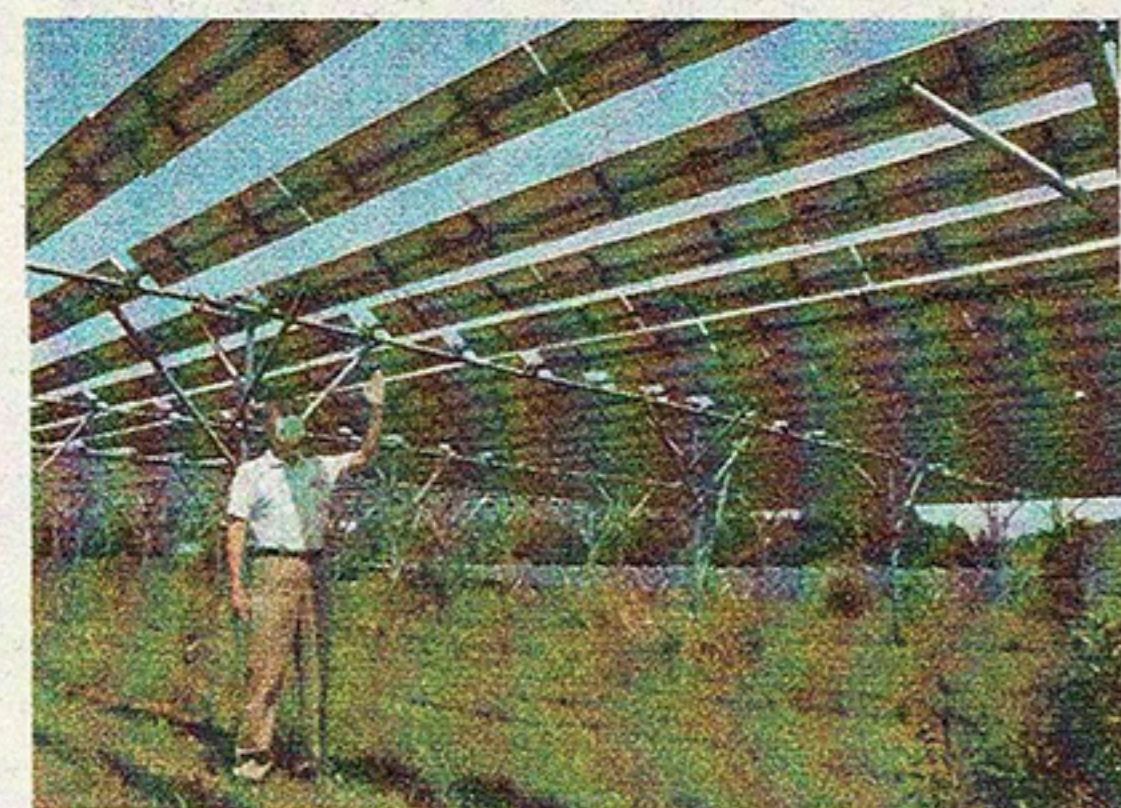
1.5℃ の約束



耕作放棄地にソーラーシェアリング（営農型太陽光発電）を導入し、脱炭素化に向け再生可能エネルギーを生み出すとともに、農地を再生させる取り組みが千葉県匝瑳市で進んでいる。中心となって

再生エネルギーも農業もOK

運営しているのは、環境問題に関心のある農家や有志でつくる発電会社「市民エネルギーちば」。1年間に約760世帯の年間消費電力量に相当する約324万キロワット時を発電して売電し、パネルの下で大豆や麦などを栽培。炭素をより土中にためる栽培方法にも挑戦している。



ルや機材を設置した。パネルは太陽の光が入りやすいよう長さ2メートル、幅約35センチと細長い。パネルを

設置する支柱の高さはトラクターが入れるよう3メートルほどある。パネルによる遮光率を3分の1程度に設定し、時間帯によって日が差す場所が変わるため畑全体に満遍なく光があたる。

現在は計13万平方メートルの畑に32カ所の発電施設を設置。当初は資金集めに苦労したが、最近では金融機関からの融資のほか、環境問題に関心のある企業から設備拡大の費用を投資してもらったケースも増えている。農業法人も設立して若い

畑に設置されたソーラーシェアリング用の太陽光発電のパネル。千葉県匝瑳市で6月

移住者を受け入れ、環境に優しい有機栽培を実践。昨年からは、土の中の環境を耕さずに維持することで炭素を土中にためやすくとされる不耕起栽培にも取り組んでいる。

共同代表取締役を務める東光弘さん（56）は「トウモロコシなど太陽の光がかなり必要な農作物に関して気候条件によっては難しい場合もあるが、ほとんどの作物は栽培できる」と説明。「ソーラーシェアリングが全国に広まれば、脱炭素に加え売電によって農家の収入も増え、農業の活性化も期待できる」と意義を語る。【桐野耕一】